保険毎日新聞「みちくさ保険物語」64

保険史料からみた漫画の歴史(8) 第一徴兵の戦時期の絵葉書

先月、チェコのオーケストラの演奏するドヴォルザークの「新世界」を聴いた。彼らにとっては、十八番中の十八番。ほとんど伝統芸能のような域に達している。演奏技術云々というよりも、それぞれの楽器、とくに木管楽器のパッセージが、あるべきところにきちんと収まっている。プロのオーケストラにとっては当たり前のことであるが、収まり方が半端なく自然だ。作為の跡がないといったらいいのだろうか。

芸術においては、必ずしも本場ものがいいというわけではない。東京にも優れたオーケストラがたくさんあり、立派な「新世界」を聴かせてくれる。最近では、ブロムシュテット＝NHK 響の定演での「新世界」が素晴らしく印象に残っている。にもかかわらず、彼らの「新世界」が絶品なのは、演奏者がこの曲を何回となく演奏している蓄積がものをいっているのではないかと思う。それが伝統芸能と申し上げた理由である。

保険も商品技術的にみると単なる金融商品のひとつであるといえる。しかし、各国の保険市場を見ると、保険を提供する側と保険を受容する側の「交流」を媒体として、それぞれ独自の「保険文化」が形成されているように思われる。保険が社会に貢献する存在であるためには、ある程度成熟した「保険文化」が必要だ。そして「保険文化」を形成するのが、それぞれの国々の保険の歴史だと考えられる。同じ保険商品であっても国によって受容の在り方が異なるのは、同じ譜面の「新世界」でもニューヨークのオーケストラとパリのオーケストラでは違う演奏をするのと同様である。

「新世界」でもうひとつ不思議なことがある。チューバという金管楽器の低音楽器がある。「新世界」の中で、この楽器が登場するのが実質８小節だけである。具体的にいうと、２楽章の有名な「家路」の旋律が始まる前奏部分と後奏部分だけだ。後はすべて休み。江戸時代には相撲力士のことを「１年を２０日で暮らすよい男」といったが、チューバ奏者は、まさに「５０分ほどもある大曲を３０秒で暮らすよい男」である。

へそ曲がりの鑑賞者である私の楽しみは、「新世界」演奏中のチューバ奏者の挙動を観察することだ。もっとも印象的だったのが、ショルティ＝シカゴ響の演奏会。チューバ奏者は自分が吹いていない間、とりわけ終楽章では音楽に没入して一緒に「演奏」していた。減少として記述すれば、声を出さずに歌っていたのである。そうかと思うと、ドヴォルザークがどうしてチューバの出番を作ってくれなかったのだろうと考えて憂鬱な表情を浮かべている奏者もいる。親切な作曲家が、チューバ補作版の「新世界」を作ってやればよさそうなものだが、そうなると小難しい批評家がドヴォルザークの響きが失われたなどと大騒ぎしそうだ。

さて本題の保険に戻ろう。保険は契約者のためにならなければ意味がない。消費とは本来そういうものだ。しかし保険の契約をとおして、社会に貢献するとしたら、契約者にさらに大きな満足を与えることになる。とりわけ保険は契約したからといって、すぐにその効用が感じられるものではない。そのため、追加的な満足の重要性が大きい。

徴兵保険については、すでにこの連載で説明している。子供を被保険者とした生存保険契約であり、基本的には徴兵された場合に保険金が支払われるものである。保険商品の特徴の中に、戦時経済との親和性があるが、この保険では、契約者の効用は、とくに愛国心と結び付いていた。

今回紹介するのは、3 つの綴りになった第一徴兵保険の宣伝用絵葉書である。最初の絵葉書には、倹約や節約を継続すると、家庭にゆとりが出来、体位も向上する。その結果、保険を通して「貯蓄と健康」が保障されるというものである。保険料の捻出は、「塵も積もれば山となる」という論法が保険話法で活用されることが多い。この絵葉書は昭和 14 年頃のものであるが、ここに描かれた服装は洋装が基本であり、漫画のタッチもモダンな印象である。

次の画像は、保険料積立金の活用についての説明がなされている。保険会社が国債を購入し、それが国防費に充てられて国の生産力拡充につながり、最終的に国民の所得が増大するという循環が示されている。この循環については厳密に考えれば疑わしいものであるが、当時の庶民にとっては、「一は国家発展の力となり、一は御一家の将来を守る御愛児の貯蓄ともなり、実に保険こそは一石二鳥の理想的貯蓄方法です」という文言は、それなりの説得性があったに違いない。

最後の 1 枚は、政治的スローガン。日本国旗の下に満州国旗と五色旗が描かれ、東亜新秩序を謳っている。徴兵保険はいわゆる「こども保険」なので、「こども」の視点から国策に協力するよう訴えかけている図柄である。歴史的には侵略戦争であることは疑いないが、「東亜新秩序」という考え方が庶民に浸透した背景には、徴兵保険の担った役割は小さいものではなかった。

ただし徴兵保険をひとこと弁護すれば、戦争を商売のネタにしていたのは事実であるが、販売する保険商品は、あくまで庶民の貯蓄としての生存保険であり、保険給付が庶民生活を豊かにさせたという点を見落としてはならないだろう。作家、向田邦子の父である向田敏雄は、当時、第一徴兵保険の仙台支店長として保険募集に従事していた。長女は「邦子」と名付け、長男を「保雄」としたのが頷ける。敏雄は、『父の詫び状』の父であるとともに、戦前戦後をとおして活躍した同社の熱心なサラリーマンであった。

保険毎日新聞「みちくさ保険物語」64

生産力拡充資金
國防費
公債の買入
國民の所得
保險料
御愛兒の保險料は？
かうして國策に用ひられます
お預りした保險料は會社を通じて戰時公債に消化されて砲彈となり飛行機となり、皇軍の武威を輝かす原動力に振向けられるのです。
一は國家發展の力となり、一は御一家の將來を守る御愛兒の貯蓄ともなり、實に保險こそは一石二鳥の理想的貯蓄方法です。
第一徴兵保險株式會社
東京・銀座

我等の貯蓄で東亞新秩序の建設
お父さんや兄さんは東亞新秩序建設の爲に勇しく戰かつて居られます！
銃後を守る
節約してコドモの保險に加入しませう！
第一徴兵
金